

# アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



石田徹也《めばえ》1998年頃 板、アクリル 145.6×206.0cm

窓から白い光が差し込む、授業中の教室。丸顔に短髪、胸元にエンブレムが付いた制服を身に着けた、顔も体つきも同じ青年たちが、前を向いて座っている。一人として目の焦点は合っておらず、うわの空で、虚ろな表情をしている。灰色を帯びた色調の中、ひととき不穏な空気を放つのが、大きな顕微鏡と一体化した人物である。見ることにだけ機能を特化する機械になった、不気味な存在だ。管理、統制された社会システムの比喩としての学校。見られ、抑圧された現代人の、声にならない心の叫びが描き出されている。虚構のイメージであるものの、文房具やズボンの格子、床の木目にいたるまで、細部が執拗に描きこまれている事で、現実との繋がりを強く感じさせる。

(上席学芸員 川谷承子)

No.  
**116**  
2014年度 | 冬 |

# さらにも明るく賑やかな美術館へ

館長 芳賀 徹

本館では「美少女の美術史」展が  
まる二ヶ月の長期展示を終えて、つ  
ぎの「風景解剖学」展が始まったと  
ころである。

「美少女」のほうは、青森・静岡・  
島根の三つの県立美術館の学芸員男  
女三人が、かなり長い間企画を練っ  
て実現し、右の三県の順序で巡回さ  
せている。三人（静岡は村上敬上席  
学芸員）は昔から気が合うらしく、  
四年前には「ロボットと美術」展を  
共同企画して巡回させた。趣味と志  
を共にする学芸員が、地域のへだた  
りを越えて親密に交流し、基本資金  
も獲得した上で、ちょっと珍しい特  
別展を立ち上げる——というのは、  
公立美術館運営の新しい試みとして  
面白く、推奨されるに値するのでは  
なからうか。

現代のマンガにもアニメにも全く  
暗い私には、金ピカのハデハデの図  
録からして驚きの対象だった。美少

女といえは光源氏が惚れた童女紫の  
上から春信錦絵の中の梅の枝を折る  
娘、そして竹久夢二と鏑木清方、そ  
れに私の幼き日の初恋の少女、とい  
うのが私なりのつましい日本美少  
女の系譜だったが、それが今回の現  
代少女の華麗なる大パレードの中に  
爆破されてしまった。だが、その中  
でもワンピース姿で家鴨を抱く十

一、二歳の少女の小さなフィギュア  
など、実に可愛らしくて気に入った  
し、太宰治原作によるアニメ「女生  
徒」もまことに雰囲気がよく、私は  
四、五回も繰返し観賞した。

「風景解剖学」は当館の一番若い学  
芸員（平成二十五年春就任）浦澤倫  
太郎君のデビュー企画である。「風  
景・解剖学」ではなく「風景解剖学」  
だと固執するような男なので、私は  
内心少々心配していた。ところが開  
催直前に一周してみると、意外にも、  
大変よく工夫してあって面白い。大

地、山、建物、道、水、空と分類さ  
れて並ぶと、見なれたはずの館蔵品  
までが「おや」と思うほどに新しく  
見えてくる。フランスの科学哲学者  
G・バシユラールによる地水火風の  
想像力分析などを活用して、風景を  
さらに夢想の心理学から解釈し直し  
てみせるのは、浦澤氏の五年後の仕  
事か。

さかのぼって二十六年度春以来の  
「佐伯祐三とパリ」、「下岡蓮杖」、「ア  
ニマル・ワールド」の三展も私にと  
ってはみな実に面白く、いい勉強に  
なった。下岡蓮杖の明治初めの名刺  
大の写真など、私は一つ一つを虫眼  
鏡で見つめて、あの激動の時代を健  
気にとくましく生きた民衆の表情を  
なつかしんだ。本年度は、年度末に  
本館得意の「石田徹也展」の大企画  
が待ち構えており、来年度の篠山紀  
信展、再びの富士山展、そしてウイ  
ーン美術史館展へとつづいて、また

も大勢のお客さんに藝術のよろこび  
を伝えてゆくに違いない。

昨年十月末の二日にわたるロダン  
館二十周年記念の行事も、坂田芳乃  
副館長ら担当者の活躍によって大い  
に充実した。なによりもパリのロダ  
ン美術館館長のカトリーヌ・シユヴ  
イヨ女史による二回の公開講演は、  
ロダンの同時代とその後の世界にお  
ける位置づけを鮮明にしてくれた  
し、若手研究者の発表の一つ一つに  
対する女史の批評も実に懇切で、パ  
リと静岡の間の絆を暖かく力強いも  
のとしてくれた。初日のシンポジウ  
ムには、県知事川勝平太氏も参加し  
て、ロダンに関する蘊蓄と見識を披  
露した上に、ロダン館のさらなる充  
実を約束してくれたのは、私たちに  
とってこれまた心強いことであっ  
た。——さあ、平成二十七年には本  
館をさらにも明るくにぎやかな学び  
と楽しみの場としてゆこう。



桜文鳥 《あかねちゃんとおひるちゃん》  
2002年、作者蔵

# 聖地草薙についてのいくつかの思い出

木下直之

静岡県立美術館第三者評価委員会委員長・東京大学大学院教授（文化資源学）

静岡県立美術館ができるずっと前から、草薙は聖地でした。ヤマトタケルも草薙の剣も関係ありません。サッカー場がある「草薙へ行こう」を合言葉に、地区大会を勝ち抜き、県大会へと進むことが中学生のわたしの夢だったからです。

幸運にもそれは実現、不運にもそれは一回戦敗退に終わりました。タイムアップの笛が鳴った時、涙が止まらなくなりました。もう四十五年が過ぎたというのに、美術館を訪れるたびにあの時の気持ちがよみがえります。

聖地に出現した美術館が気にならずにはありません。わたしは神戸の美術館で学芸員として働いていました。「十九世紀の日本美術」という展覧会（一九九〇年）を企画、彫刻といっしょに人形を並べ、美術といっしょに見世物を考えていたこ

ろ、静岡県立美術館で「人体表現」その歴史と現在」というシンポジウム（一九九一年）が開かれたのです。

その時、館長がこんな挨拶をされました。「ただ単に物を並べるだけでございましたら、展覧会は見世物小屋と大して変わりはないわけでございますから、これを見世物小屋にしないように、美術館らしい陳列をしなければいけない。」

この発言に、わたしはこんなふう限らず、この世の中で、ただ単に物が並んでいるという状況がありうるだろうか。まして、見世物小屋は物を見せるための場所なのである（拙著『美術という見世物』）。

今思えば若気の至りです。美術館活動の根底に学術研究がなければならぬという館長の真意は理解していたのに（それは着実にこの美術館

に根を張ったと思います）、つい見世物の肩を持ってしまったのでした。

なにしろそのころのわたしは、籠細工や貝細工といった見立て細工の見世物、さらに幕末になって爆発的に人気を博した生人形の世界を追いかけることに夢中だったからです。

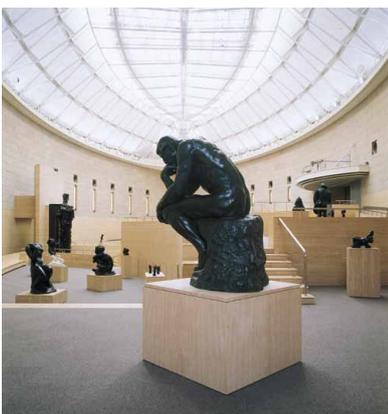
明治を迎えると、西洋式美術教育を受けた彫刻家が登場、入れ替わるように人形師たちは舞台から姿を消しました。明治九年（一八七六）の工部美術学校の開校（イタリヤから彫刻家ラグーザを教師に迎えました）と十三年の観古美術会開催（人形師安本亀八が彫刻部門の審査員を務めました）が、一瞬の交差といふべきかもしれません。

彫刻家たちのつぎの交代劇はロダンによってもたらされました。日本人がロダンの芸術を知ったことで、生人形はさらに過去へと追いやられ

たのです。したがって、静岡県立美術館にロダン館が出現したことにも平気ではられませんでした。

縁あって第三者評価委員を務めてまいりました。会議が終わると、いつもロダン館に足を運びました。ロダンとは何者だろう。ロダンの手からつくりだされた人の姿をしたものとは何だろう。そして、それらを並べたロダン館とは何だろう。県がなぜ税金を投じてまで建設したのか。もちろん、それが幕末の生人形とどう違い、両国や浅草にあった見世物小屋とどう違うのだろうかという二十年来の問いも、解けないまま、あいかわらず浮かんでいます。

ロダン館は謎に満ちています。こんなふうには、美術館は考える場所でもあつてほしいと思います。



ロダン館内風景

# 石田徹也展

## —ノート、夢のしるし

2015年1月24日(土)～3月25日(水)

化の中にありました。

石田が、その作品性を明確に示す作品を発表したのは、一九九五年からの約十年間のことです。バブル崩壊後の「失われた十年」と呼ばれる時代と、おおよそ重なります。この時期、世界自由市場主義、グローバル化と並行する不況の中、かつて世界で高く評価された終身雇用、年功序列、企業内福祉などに支えられた日本の経営が、外国から圧力の中、規制緩和、民営化、自由貿易の徹底などにより、じわじわと崩壊していききました。とりわけ、労働にまつわる社会構造の大きな変化は、我々を取り巻く生活の様を大きく変え、現在、ますます深刻さを伴って社会に不穏な影を落としています。「フリーター」、「非正規雇用」、「ニート」、「ブラック企業」などの用語で語られる、若年雇用や労働環境の問題が、この時期から進行しつつあります。

大学在学中に石田が、友人の平林勇と共同で制作した《居酒屋発》、《ピアガーデン発》には、短髪で、石田本人によく似た顔の、ネクタイを締めたスーツ姿の若者が、機械と組み



《居酒屋発》当館蔵



《彼方》当館蔵

合わせたスタイルで描かれています。このスタイルは、後に、石田の表現を大きく特徴づけるものへと展開して行きますが、ここでは、まだ、描かれている人物に、後の作品に見られる暗さはありません。電車ごっこに興じ、酔った同僚を抱えながら千鳥足で歩くサラリーマンは、どこか滑稽で、ユーモアが感じられます。

背中から、巨大なゴキブリが絡みついた、サラリーマン姿の青年が、ごみ箱をあさる《不安な夢》、ビルに囲まれた一角に、足を負傷して包帯を巻いたサラリーマンが、身を潜め、何かから逃れようとする《兵士》

交じりの、もはや若くない男が、使古されたポンコツ車と一体になって、地の果てのような寒々しい場所で、看護婦に伴われながら、力尽きている様が描かれています。力ない悲痛なつぶやきが画面から聞こえてくるかのようです。

石田徹也が残した作品は、現在のわれわれに何を語りかけるでしょうか。石田徹也は二〇〇五年に亡くなりましたが、彼が残した絵の中に、今を生きる者の姿が映し出されているように感じるの、私だけでしょうか。

(上席学芸員 川谷承子)

をはじめ、一九九六年頃から、石田の絵には次第に、不安や苦しみが影を落とし始めます。一九九九年に描かれた《彼方》では、白髪

石田徹也が生まれたのは、一九七三年。一九七〇年代前半生れの、第二次ベビーブーム世代にあたり、別名、団塊ジュニアとも呼ばれる世代です。この世代の若者が、中学、高校時代を過ごし、高校を卒業する頃までの日本は、バブル経済のピーク期にあたっていました。大学進学率は倍増し、求人倍率も高く推移していましたが、一九九一年をピークに、一気に下落し、経済は低成長期へと入って行きます。石田徹也が、故郷の静岡県焼津市を離れ、東京で暮し、美術大学で学んだ四年間（一九九二～一九九六年）の日本は、大きな変

# 篠山紀信 写真力

## THE PEOPLE by KISHIN

2015年4月11日(土)～6月21日(日)

真」だと言います。

篠山の「写真力」が、美術館という空間と一つになった時、力強いエネルギーを発することでしょう。

GOD.. 鬼籍に入られた人々

この部屋は、真っ黒です。部屋に入られて、少し怖いと思われるかもしれませんが、なぜなら、この部屋は、既に亡くなった方の部屋。もちろん、被写体は、三島由紀夫、夏目雅子など、いずれも誰もが知っている有名人です。篠山の写真イメージによって、かつての面影が鮮烈に蘇ります。

STAR.. すべての人々に知られる有名人

「写真家は時代の映し鏡であり、突出した出来事や人を撮らねばならない。」と篠山は語ります。このシリーズは、彼のライフワークとも言えるシリーズ。スターの内面に秘められた光と影、篠山は深い洞察力で被写体に迫ります。スターが最も輝く一瞬が捉えられており、そのイメージは、観者に鮮烈に伝わります。

SPECTACLE.. 私たちを異次元に

連れ出す夢の世界

「写真は嘘」「嘘の嘘は本当」...。そのように考える篠山にとって、虚構の世界を撮ることは、大きな興味をそそられたことでしょう。この章では、来場者のいないデイズニードを自ら「シノラマン」というキャラクターとなつて撮ったシリーズ、また撮っているうちに役者と一心同体になるという歌舞伎のシリーズを中心に紹介します。

BODY.. 裸の肉体、美とエロスと闘い

篠山は、初期の造形的なヌードから、七〇年代の「激写」シリーズ、『Santa Fe』（宮沢りえ）、『water fruit』（樋口可南子）、そして最近では『20XX TOKYO』など、つねにヌードで社会現象を巻き起こしてきました。ヌードという人間の本来のあり方と社会常識・モラルとの葛藤を自ら続けてきたのです。



ジョン・レノン オノ・ヨーコ 1980年



山口百恵 1977年

ACCIDENTS.. 二〇一一年三月一日、東日本大震災で被災された人々の肖像

東日本大震災発生五〇日後に被災地に入った篠山は、廃墟の風景を撮り、被災者たちのポートレートを撮影しました。被災地において、篠山は「人知を越える規模で自然があらたな自然を作り出したその「力」に畏怖と畏敬の念をおぼえ、震災の傷跡の光景にある種の神聖さすら感じたと率直に語っています。篠山は、大震災という悲劇を、一人の写真家として真摯に受け止め、被災者のありのままの姿をカメラに収めました。この写真が、何を語るのか、また何を訴えるのでしょうか。

(上席学芸員 泰井良)

一九五〇年代後半から今日に至るまで、写真の第一線を走り続ける篠山紀信（一九四〇—）。

時代を見越し、時代に先駆けるその活動は、常に話題をさらい、また賛否両論を巻き起こしてきました。

本展覧会は、これまで美術館での回顧展を拒み続けてきた篠山が、五〇年間にわたり撮影してきた写真を「写真力」という新たなストーリーをもとに世に問う大規模な個展です。「写真力」とは何か？篠山は「写真の力が漲った写真」であり、撮られた者も、撮った者も、それを見る人々も、啞然とするような「尊い写

# 黒田清輝《富士之図(六点)》について

(平成25年度 新収蔵品)

上席学芸員 泰井 良

## 1 黒田清輝について

一八六六一一九二四(慶応二―大正十三) 薩摩藩士黒田清兼の長男として鹿児島県に生まれる。一八七二(明治四)年、元老院議員などを歴任する伯父黒田清綱の養嗣子となる。一八八四(明治十七)年、法律学研究のためフランスに留学。パリで山本芳翠らと知り合い、画家になることを勧められる。一八八六(明治十九)年、パリのアカデミー・コロロッシで、ラファエル・コランに師事。帰国後は、東京美術学校教授に就任、白馬会を創設した。また帝国美術院院長、貴族議員を歴任するなど、美術行政にも尽力した。

## 2 《富士之図(六点)》について

板、油彩

一八九八(明治三二)年

二五・〇×三三・〇cm

図一の右下にサイン・年記 SK Doushi

Janv.98

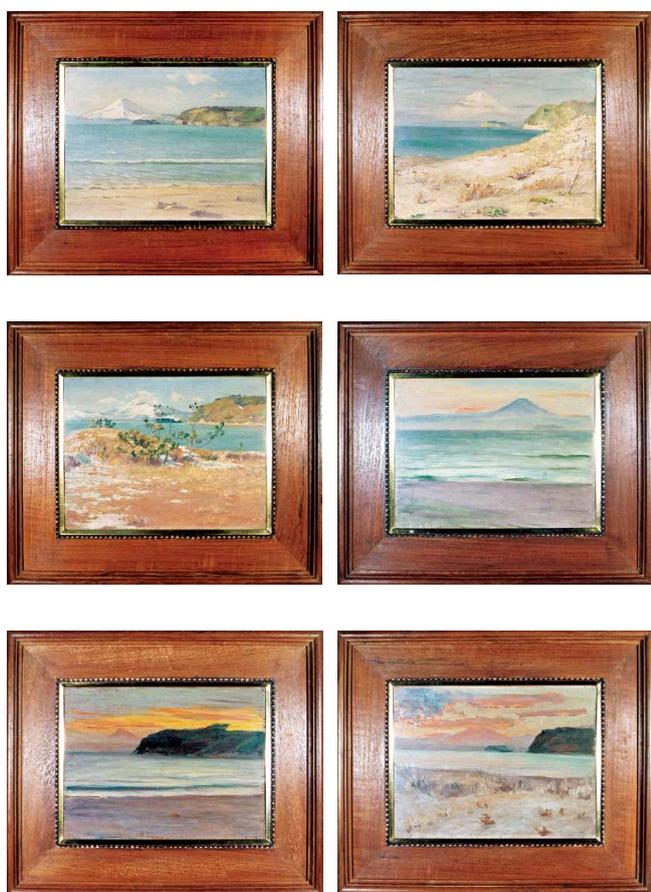
裏面に「黒田清輝遺作展覧会」(東京美術学校 一九二四・大正十三年十一月五日〜十五日)の出品ラベル有。

箱書きに、「黒田清輝先生真筆 富士之

図 門弟 和田英作識」。

(1) 本作品を制作した時期について

「富士」は、六枚の連作で、逗子や鎌倉の海辺から四季折々の富士を遠望したもの



で、海や山の朝夕の色調の変化をたくみにとらえていて、いずれも小品ながら佳作で、彼の特徴をよく表している。」

〔黒田清輝〕隈元謙次郎 一九六六年 日本経済新聞社)

「明治三二年四月、黒田は東京美術学校教授となった。この年は美術学校騒動が起こった時で、岡倉天心は校長の席を退いたが、黒田はこの年の一月から夏にかけて逗子に滞在し、学校騒動を静観していた。逗子ではコランの作品を模写したりしながら周囲の風景など小品の連作を試みている。『富士六景』もこの時に描かれたものである。極く小さい画面ではあるが、逗子から鎌倉にかけての海岸から遠望した富士の季、時間に変化するさまを描いている。明るい陽光の彼方にかすむ富士を中心として、時に太く確信的な筆触を見せ、また繊細な筆使いで描いたりして多様な画面をつくっている。第三回白馬会展に出品されている。」

(日本の名画五『黒田清輝』陰里鉄郎 一九七五年 中央公論社)

本作品を制作した一八九八年、黒田は、三二歳の若さで東京美術学校教授に就任する。この年、逗子に滞在した黒田は、当初養神亭にいたが、その後、一軒の家を買い求め、八月初旬まで滞在した。この逗子滞在中、本作に加えて《海辺(六図)》、《河辺(六図)》、《野辺(六図)》などの連作を制作したと考えられる。そして、これらを含む十九点を同年十月に開催された白馬会第三回

展に出品した。そして、一九〇〇年五月、黒田は再び渡欧する。それゆえ、本作はこうした帰国と渡欧の間、しかも美術界の騒動の目まぐるしい最中に制作されている。

(2) 黒田清輝にとつての「富士」というモチーフ

日本人画家にとつて「富士」を描くことは、何を意味するのか。「富士」を描いた画家には、横山大観、和田英作など、他にも多くの画家がいる。「富士」は、それ自体が究極の美を持つ山であり、他の山とは異なり、そこには古来、歴史、神話、信仰など様々な象徴的な意味が込められてきた。それだけに、画家が「富士」に取り組むことは、容易いことではない。

黒田清輝にとつても、「富士」は他のモチーフとは違う象徴的な意味があったと考えられる。「富士」は、ヨーロッパ滞在生活中長かった黒田にとつて、とりわけ日本を象徴するモチーフであった。日本人画家たちが、ヨーロッパ伝来の油彩画を用いて、いかに日本風景を描くかという課題と葛藤する中で、黒田は、真正面から、日本の象徴である「富士」というモチーフに取り組んだ。

それゆえ、この《富士之図》には、黒田の「日本の風景をヨーロッパの伝来の油彩画でいかに描くか」という探究心が込められており、また「富士」という日本の象徴的モチーフによって、日本人の精神を体

現しようとする試みが伺える。

そして、こうした姿勢は、後に弟子の和田英作「富士」連作に受け継がれていく。和田は、住居とアトリエを清水・三保に移し、「富士」と「羽衣天女」の制作に意欲を傾けていくことになる。

### 3 研究者の意見

ここで、本作の収集にあたり、研究者の方々に意見をいただいたので紹介する。

「この作品は、『黒田清輝作品全集』（一九二五年、審美書院）に「三八三 富士六景 伊藤平三蔵」として、図版が掲載されており、『カンヴァス日本の名画五 黒田清輝』（陰里鉄郎著 一九七九年 中央公論社）にも、二図が図版掲載されている。また、第三回白馬会出品作との解説がある。

東洋西洋の風景画を収集の柱としている静岡県立美術館にとつて、日本の風景表現を大きく変える契機をつくった黒田清輝の作品は収集にふさわしい。富士山が描かれている点でも地域にゆかりの作品と言える。」

(東京文化財研究所企画部副部長 山梨絵美子氏)  
「富士山を描く六点組の作品は、静岡県立美術館の収集方針に叶った主題である。作者の黒田清輝は、日本近代洋画の父といふべき存在であり、その代表作にも挙げられる本作を収蔵することは美術史的にも重要である。」

保存状態がたいへんよく、今後の展示活

用にも有益であろう。」

(東京藝術大学美術館准教授 古田亮氏)  
この中で、山梨氏は、黒田の作品を「日本の風景表現を大きく変える契機を作った」と位置付けている。この意味は、新派と旧派といった枠組を超えて、戸外における油彩写生の先駆的な役割を担った黒田の作品を評価したものといえる。

### 4 本作収蔵の意義

当館は、コレクション収集方針の一つとして「富士山をモチーフとした作品の収集に努める」という方針を掲げている。二〇〇四年には、当館所蔵品による「富士山の絵画」展を開催し、富士山の絵画を一堂に紹介した。また、明治期以降の日本近代洋画の分野でも、すでに和田英作《富士》(一九一八・大正七年)や五姓田義松《富士》(一九〇五・明治三八年)などを収蔵している。

黒田清輝は、和田英作の師であり、日本近代洋画の先駆者、確立者である。しかし、黒田の作品は、当館には、一点もなく、二〇一二年に開催した「日本油彩画 二〇〇

年」展という日本の油彩画史を概観する展覧会においても、東京国立博物館より作品を借用し、当館コレクションの不足を補った。今回の収集によって、黒田清輝の「富士」をモチーフとする作品が加わることで、当館の日本近代洋画コレクション及び富士山の絵画が充実し、今後、日本近代洋画史を展観することも可能となる。

## 本の窓

### 『現代アートの 本当の学び方』

フィルムアート社 二〇一四年刊行



「もっと知りたい」という思いから「学びたくなる」ご経験はありませんか？興味があることを学ぶのはごく自然な反応ですが、「現代アート」ともなると学ぶには果たしてどんな方法があるのか。そもそも、これまでにない新しい作品を生み出す「現代アート」の分野に学びは必要なのか。そんな素朴なように実は奥が深い疑問について、第一線で活躍している執筆陣がリアルな学びの現状を語りだします。

周囲に目を向けてみると、美大以外にも現代アートを学ぶ機会は増え、多様化してきています。制作をしたい方はもちろんのこと、学びという面から作品を生み出す背景を知ること、さらなる現代アート鑑賞のおもしろさが見つかるかもしれません。

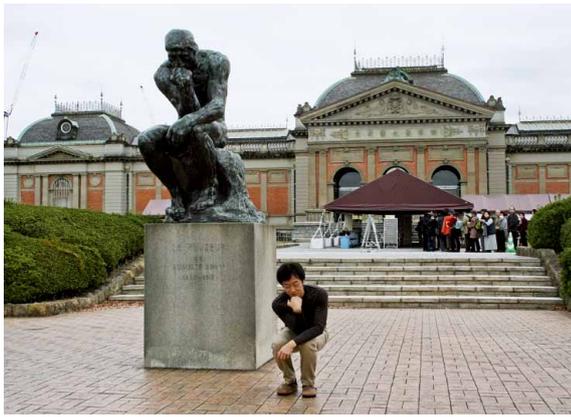
(学芸云課臨時職員 松浦文香)



# 特別な場所

雪が降ればニュースになるほどの温暖な気候、緑豊かで風光明媚な土地柄、駿河湾の豊富な海の幸、富士山の伏流水が生み出す美味なるお酒……。こうした環境で育まれる、総じて温和な県民性は、しばしば欠点のように言われたりします。しかし、県外から赴任した私には、むしろそこそが静岡の誇るべき素晴らしい特質に思えてなりません。

そしてもう一つ、この静岡県立美術館の存在は、世界遺産富士山、原の白隠禪師に負けないくらい静岡の財産だと私は心からそう思っています。古今東西の幅広い分



京都でも、ロダン体操。

(撮影：井並林太郎)

京都国立博物館研究員 福士雄也

野にわたる粒よりの作品によって構成される特色あるコレクション、それらの魅力を最大限に引き出し伝えるユニークな展覧会活動や普及事業の数々。日常生活のすぐそばに、しかも一流の美術があるということには、決して数字には置き換えられない価値があるはずですよ。

そんな魅力ある美術館を昨年八月末に退職し、私は九月から京都国立博物館に勤務しています。新館オープンの渦中で右往左往しながら、いま二〇〇七年四月からの約七年半を振り返ってみても、特別何かを成し遂げたというわけではありません。それよりも、職員が一所に集まって昼食をともにし、時には館長も加わってあれやこれやの話をするといった何気ない日常が思い出されるにつけ、あの親密な一まさに静岡らしい一空気感こそが、静岡県美がもつ魅力の一つの源なのではないかと考えたりします。

職場は変わりましたが、なすべき仕事の根幹は何も変わりません。美術を通じてご縁をいただいたすべての皆様に感謝申し上げますとともに、美術を愛する人間の一人として、今後も変わらずお付き合い下さいませようようお願い申し上げます。静岡県立美術館は、これからも私にとって特別な場所であり続けます。

## 利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)  
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

## アクセス

- ◎JR「草薙駅」から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

テレフォン・サービス：054-262-3737  
ウェブサイト：<http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

無料託児サービス  
毎週日曜日および祝日10:30～15:30  
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。  
※詳細は美術館学芸課までお問い合わせください。  
(Tel：054-263-5857)



## 風景とロダンの 静岡県立美術館

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2  
総務課 / Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767  
学芸課 / Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742

## 2014年度を受賞

### 第26回 國華賞

泉 万里『中世屏風絵研究』  
(平成25年10月、中央公論美術出版)

### 平成26年度 鳥取県教育委員会表彰

泉 万里



## 収蔵品展

2015年1月24日(土)～3月1日(日)

富士山の日記念展示 富士山の絵画



木村武山《羽衣》(左隻)

## 休館のお知らせ

平成26年12月27日～平成27年1月23日の間、工事等により休館となります。ただし1月2日～1月4日は本館のみ開館します。工事の内容は、ロダン館天井照明のLED化等です。

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。